

社員が主役の会社づくり ～100年企業を育てる～

大口町 服部農園有限会社
水田作

【令和2年3月25日掲載】

大口町で水稻を中心に総面積138haを栽培し、町を代表する水田作の担い手となっている服部農園有限会社を紹介します。2014年の経営移譲をきっかけに、2代目となる服部忠さん、都史子さん夫婦が中心となって会社のあり方を見つめ直し、人材育成に力を入れた取組で、平成30年度、全国優良経営体表彰経営改善部門農林水産大臣賞を受賞しました。

突然の就農

服部都史子さんのご両親が初代として築いた服部農園は、1980年代、町のほ場整備をきっかけに地域に先駆けて大型のトラクターを導入したところから、地域の水田を任されるようになり、規模を拡大してきました。

忠さんが就農する転機となったのは1994年、都史子さんの父靖弘さんが脳梗塞で突然倒れ、当時都史子さんと交際中だった忠さんが駆け付けて作業を手伝ったことがきっかけだそうです。そこから忠さんも主となって農作業をするようになり、ついには仕事を辞め、就農することを決意しました。当時を振り返り忠さんは、未経験だった農業が「大変な時期だったけれど、作業が肌に合って苦にならなかった。一生やっていると決めることができた」と話します。



(左から) 服部都史子さん、忠さん

経営移譲の年に価格暴落を経験

服部農園はその後法人化し、正社員を迎えて規模を拡大していきました。都史子さんは社員の昼食づくりなどサポート的な役割をした後、会社勤めをしていましたが、靖弘さんが予めより決めていた「70歳で経営移譲する」時期に合わせ、都史子さんも本格的に経営陣に参加、2014年に経営移譲を行いました。

ところがその年に、米の価格が大暴落し、赤字決算となりました。服部さん夫婦は、今後の経営をどのようにすべきか、真剣に考える必要に迫られました。

社員全員で経営を考える

経営を立て直すにあたり、服部さん夫婦は、徐々に人数が増えてきた若い社員達を巻き込んで全員参加での経営を目指しました。経営感覚を養うための研修に社員と一緒に参加することにし、遠方で開催されるものにも、自分たちの貯金を切り崩してでも何度も足を運ぶほど力を入れたそ

うです。また、決算のシミュレーションを行う演算を作業後毎日実践し、社員全員が財務諸表を読み解けるようになりました。

実際の会社の事業成績は、毎年決算報告会を開き社員に全て開示しています。これにより「自分たちで会社をつくる」という意識が生まれるそうです。こうした効果は日々の農作業にも表れ、効率的な段取りや作業の動線づくりなどのカイゼン活動を社員が自主的に行うようになりました。

「人」が服部農園の魅力に

服部農園は経営移譲後、情報発信によるファン作りにも力を入れ、直販の比率を高めています。

服部農園のブランド力を高めるために、自分たちが伝えたいことは何かを懸命に考えた末に、服部農園にしかない、どこにも真似できないものは「人」だと気づきました。先代から築いてきた和気あいあいとした雰囲気を守りながらも、経営改善に向けて時には苦勞もし、成長していく社員の姿を前面に出してインターネットで発信し始めると、注目されるようになり、メディアで紹介されるなど知名度を上げる足掛かりになりました。また、600人を超える地権者には、従業員総出で手書きでハガキを書くなど、顔の見える関係づくりを心がけています。

服部農園の経営理念は「100年企業を育てる」です。地域で将来にわたり農業が産業として根付くために、時代を担う後継者、また地域の理解が不可欠だと考えています。



2019年入社式

ハットリライスマーケット

服部農園は2018年、精米工場の新設と併せて直売所「ハットリライスマーケット」をオープンしました。研修やイベントも行えるゆったりとした店内にはキッズスペースが設けてあり、若い女性スタッフが小さな子連れのまま勤務するという珍しい取組を行っています。これは、多様性を受け入れる職場でありたいという都史子さんの配慮とともに、地元の購買者でもある子育て世代の女性を大切に、この直売所を地域のそうした人達とのつながりを深める場所にしたい、という思いからだそうです。

地域に愛され、ナンバーワンの企業を目指して、今後は農業体験など、農業の魅力そのものも商品になるような事業も展開していきたいと考えています。



店内の様子。若い女性スタッフが子供をキッズスペースで遊ばせながら働ける。

執筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課